

賀茂保憲女とその作品

岡 一 男

文藝の世界も、ひろい意味で、實人生の一部であるから、そこにはたらく功利的な論理に支配されて、天才のある作家がいづまでも認められず、凡庸の徒が生前にも死後にも千載の榮譽を恣いままにしていることが屢々ある。私がこれから考えようとする賀茂保憲女の如きも、その薄倖な作家の一人で、彼女が文藝評論らしいものをうけたのは、故生田春月が「王朝の二女性」という題下で、菅原孝標女とともに彼女を評し、その家集の前半をしめる、ほぼ「方丈記」に匹敵する量をもつ、序文の述懐の言葉の異常さとその短歌の清新さを簡単に指摘した（『山家文學論集』昭和二年刊）のが唯一で、一般の文藝史家からはまったく無視されて来た。いつたい彼女は、村上・冷泉・圓融の朝に陰陽頭として天文博士として曆學者として一世の景仰をあびた賀茂保憲の女としてうまれ、圓融・花山・一條の朝に生榮し、「後撰集」から「拾遺集」への間の歌壇の雰圍氣のなかにあつて作歌をつづけていたひとであるが、同時代の小馬命婦や馬内侍やみあれの宜旨や小大君の如く宮仕えもせず、また「蜻蛉日記」の著者である道綱の母の如く權

貴の妻妾でもなく、一生家居して終つたので、當時の歌壇の名流である梨壺の五人をはじめ、源重之・惠慶・聖舜・曾根好忠・藤原長能・公仕・惟成・爲頼らとの接觸もなく、従つて公私の歌合に出詠して歌壇に認められる機會もなかつた。そのため彼女はこれら當代の歌壇人に優るとも劣らない多くの秀歌を残しながら、中古三十六歌仙や「百人一首」に入らず、その敕撰集に入つたのは、鎌倉末期の「風雅集」に二首、「新續古今集」に一首のみであつたから、後世の和歌史家の注意からさえそれたのである。しかし、彼の天才は、よし小野小町や和泉式部に劣ろうとも、伊勢・中務・本院侍・赤染衛門・伊勢大輔・相模らには遙かにまさり、輕々に看過すべきでない。これを男性の歌人に比するとも、當代の長能・實方・公任の輩を遠くぬきんで、まさに曾根好忠とはくちゆうし、在原業平・藤原俊成・西行と呼應して多く譲らない歌をもつており、その近代的幽韻は、若くして自殺した感傷の詩人生田春月の心絃をも強くゆすぶつたほどである。

彼女の家集一卷は幸い「群書類從」に入り、「女流文學叢書」や「國歌大系」に覆刻され、簡單な解題と標註とが附せられて、坊間に普及しているが、誤脱が多く、善本をえられなかつたのが

遺憾であつた。特にその家集の序文は既述のごとく長文で、彼女の人生觀や自然觀や和歌論を相當精細に展開しており、注目すべきものだが、序詞・枕詞・掛詞・縁語の多い、いわゆる縁装體の文章である上、鶯魚の謬が頻りにあるから、折角この序文の特異性に氣づいた春月さえ、これを一種の回想録と判斷したほどである。が、この序文には回想録らしいところは、どこにもない。ただ「わが身のはかなきこと」を敘べ、「世の中の常なきこと」を考え、自分の作歌の動機をあきらかにしたものだ、その敘述の方法が、自分及び作歌の動機を社會及び自然において反省するといふ、一種の哲學めいたところがあり、その赤裸々な思想感情の表白が、春月もいうとおり、當時の女流文學者のなかにあつては、めづらしいのである。

勿論、この程度の思案は、聖德太子の時代から男性には幾らもあつたことで、漢文のエッセイめいたものは、學者や僧の手になつた金石文や論疏や序跋やに見え、「萬葉集」「經國集」「本朝文粹」らはその寶庫と謂つてよい。紀貫之の筆になるという「古今和歌集」序にいたつては、假名文で立派な歌論を書いていることは周知のとおりである。しかし、彼らにどれほどか發明があるとしても、いづれも儒・佛・老の學に基づいて立論しており、また外國語によつて思考しているのであつて、そこに眞の獨創がない。貫之の古今假名序でさえ、シナの詩論によつて和歌の本質を説き、またそのどだいはいちおう紀淑望に眞名で草せしめたいというではないか。しかし、貫之の和歌の選論や批評には眞名序に見られない獨創性があるが、これは彼が豊かな作歌體驗をもつとともに、

また和歌について國語で思索した結果だと思ふ。が、彼の歌論の缺陷とみなされる政教的價值觀は、その儒學的教養に災ひされたのであり、また假名序の文體の縁装式・對偶式に繁雜なのは、かの六朝風の四六駢體の惡しき模倣といつてよい。尤もこゝろいう措辭法の源流は貞觀期の歌人、たとえば小野小町の長歌のごとくに見出され、新風として歡迎されていたので、貫之がこれを大井川行幸序や古今假名序に利用したが、それは儀禮文にふさわしく考えられ、源順や曾根好忠などによつて歌台序や百首歌序に用いられた。「宇津保物語」の春日詣にある歌序もその亜流である。この文體は形式美のため思想の表現を曖昧にし、自然描寫を類型的にするのだが、論理的なカテゴリーの未發達な國語で思辯を展開するには、自己の思想感情をこゝろいう縁装・駢體の文體で整序し發展させてゆくことが必要であつた。こうして抒情詩から散文を賡す試みが貫之の古今序でいちおうの成功をみているので、賀茂保憲もこれをその家集の序において模倣したのであるが、それが前者のような公的權威をもつた立言でなく、あくまで私的な個人的體驗の反省にもとづく思索であるところに、そのユニークなところがある。當時の私家集の詞書の多いものは、いづれも、業平・平仲・伊勢・元良親王・一條攝政・本院侍從らの集にみるごとく、日記的・物語的・打開的で、回想録の形態をもち、賀茂女集のように思索的ではない。(曾根好忠の集の序は毎月集とか百首歌の序で、簡單な儀禮的なもので、彼女の集の序のように深みもなく、長くもない。)また我々は「土左日記」にすぐれて歌論を「蜻蛉日記」に鋭い心理分析を、「枕草子」にすばらしい美論を、「宇

津保物語」にみごとな社會批評を見出すかも知れぬが、これらの日記・物語の著者はあくまで藝術家として創作したのであつて、心理分析者・美學者・社會批評家として行動したのではない。清少納言のごときは、あるいは自己の獨自の社會・文化・自然についての趣味判斷をその著において體系化しようとしたか知れないが、結果としては感覺・機智・回想の文藝となつてゐる。ところで「賀茂保憲女集」の序文では、これらに反して、藝術よりも思想があらわであつて、「方丈記」や「徒然草」のごときエッセイ文藝の先驅と見做しうる。

二

「賀茂保憲女集」の誤説多き流布本を手にしても、これだけのことは漠然と考えられたのであるが、その價値の重要性が感じられるだけ、善本を獲たいという私の念願は絶えなかつた。その後、「扶桑拾葉集」三所収本や、「新群書類從」第十二巻に校合された宮内省圖書寶藏古寫本を閲しても、不審の箇處ははるけなかつた。尤も後者の奥書に識された勅物に、

賀茂保憲者、吉備麻呂五代孫丹波權介忠行子。穀倉院別當曆文章等博士。主計頭。延喜十七年丁丑生。貞元二年二月二十一日卒云々。

とあり、保憲の享年を知りえたのは、一つの悦びであつた。この集の序にみづからを「賀茂氏なる女」とよび、また集中の歌三首が敍撰集に採られ、その作者を賀茂保憲朝臣女としており、また序のなかに當時の手習詞の「あめむらの歌」をひき、巻末近くに

長歌一首があるので、この書の成立の時期が、だいたい源順集・宇津保物語・蜻蛉日記、降つても相模集と前後していることがわかるから、この集の著者には疑點はなかつた。が、彼女の生歿年代及びこの集の著作年代をできるだけ精密に考えたかつたので、彼女の父の保憲の事蹟を追求するうち、その歿年が圓融天皇の貞元二年（九七七）二月二十二日であつたことは、「尊卑分脈」で知りえたが、その享年が六十一歳であつたことは、前記の古寫本奥書ではじめて發見したのであつた。この發見は私をみちびいて彼女の生歿年代及びその集の著作時期をもあきらかにさせたのであつた。それでいちおう彼女の父及びその家庭について述べてみる。

保憲は右大臣吉備眞備（持統七——寶龜六）の裔だが、その父忠行から陰陽道をもつて著聞し、近江掾、丹波介等に歴任し、天曆六年（九五二）特旨を以て從五位下に敘せられた。「尊卑分脈」その後天徳三年（九五九）二月七日勅を奉じて占を試み、箇中の物を中てたことがあり、「群載」また素封僧家の恠を占して某月某

日強盜の侵害あるべきを豫言した話も傳わつてゐる。「今昔物語集」から、その上下に尊信されたさまが想像される。ところがその長男保憲は幼にして神童、十歳ばかりの時、父忠行にとまなわれて某家の歌えにゆき、祓殿に侍して、そこに參集した鬼神を透視して父を驚かせたことがある。「今昔物語集」長じて曆博士に任じ天曆六年三十六歳にして從五位下に敘せられたが、この時老父がまだ正六位上で、子として父を超ゆるに忍びず、大江朝綱に奏狀

を囑して、その榮爵を譲らんことを請うたので、特旨を以て忠行も從五位下を授けられた。天徳以後、陰陽寮頭・天文博士・主計頭・數倉院別當を歴任し、從四位に陞み、貞元二年六十一歳で卒したが、今年の秋、道綱母の父藤原倫寧も歿している。保憲の門弟には有名な安部晴明があり、その術法に秀いでているのを見て天文道を譲り、自分の長男の光榮には曆道を傳えた。「帝王編年光榮記」一條

は家學をうけて曆博士・陰陽博士となり、大炊頭「權記」長保二年七月九日・右京大夫を歴任し、從四位上に陞り、三條天皇の長和四年六月七日七十七歳で卒した。「小右」なお、光榮の弟に、光國・光輔らがいる。また、彼らの叔父、すなわち保憲の弟には保胤・保章・保遠らがおるが、この三人は同じ忠行を父としながら、通訓の慶滋氏をなおり、明經道に志し、儒職に歴任した。就中慶滋保胤は菅原輔正の門に入り、文章に著われ、官大内記に陞んだが、少時から彌陀を信仰し、遁世の心があつて、遂に寛和二年（九八六）出家し、寂心と號し、諸國修行の後、長保四年（一〇〇二）十月二十一日、東山如意林寺で歿した。文章は「本朝文粹」「朝野群載」に見え、和歌は「拾遺集」に入り、別に「日本往生極樂記」一卷の著もある。が、文藝史的には、彼が白樂天の「池上篇并序」及び兼明親王の「池亭記」に模して、天元六年（九八三）に作つた「池亭記」「本朝文粹」が、のち鴨長明の「方丈記」の粉本となつてゐるので有名である。なお「池亭記」に「予行年漸垂三五旬」とあるから、その享年は七十に近かつたであらう。

これだいたい賀茂保憲女の一家とその近親のことを敘しおえたのだが、なお、大江匡房が康和年中（一〇九九——一一〇六）

に著作した「續本朝往生傳」に、左の記事がある。

比丘尼緣妙者。賀茂保憲之孫。其母稱賀茂女。長和歌二。緣妙未出家之前。稱三之監君。二條關白之侍女。當初之好色也。後發三道心。落飾入道。步行都鄙。常稱常住佛性之四字。勸三人佛事。唱導爲本。八十餘而臨終之時。瑞相自多。往生不疑。

これによると、賀茂保憲女は、當時賀茂女と略稱され、歌人として知られていたことがわかるが、これはその集の序によつて記述したのかもわからない。次ぎにその女に監の君というのがあつて二條關白家の侍女となり、好色のおこないが多かつたが、のち發心し、剃髮して緣妙と稱し、都鄙に徘徊して、「常住佛性」を口癖にし、人々に佛事を勧め、唱導につとめ、八十有餘で、立派な往生をとげたというのである。二條關白は藤原教通で、彼は白河天皇の承保三年（一〇七六）に八十歳で薨じているから「水左記」その生年は逆算して長徳二年（九八六）である。監の君の生年もその前後の幾年かに求むべきであらう。

ところが、「賀茂保憲女集」序の末段に、

この歌はあめのみかどの御時に、もがさといふもののおこりて、病みけるなかに、加茂氏なるをんな、よろづの人に劣れりけり。さるなかにただもがさをなむ、すぐれて病みける。かさのみにあらず、多くの病をぞしける。と、からうじてこの歌よりなむ、蘇りける。そのほど冬のはじめ、秋のをはりなりければ、草木も風もやうやうかれもていく。つれづれなるままに、珍らしき病なりとて、このがさのぞやみを響き置

ければ、病やまさるこることによくなむ。(中略)もがさのさかりに目
さへ病やまみければ、枕上まくらの上におもしろき紅葉もみぢを人のおきたりけれ
ば、思おもひあまりて

くもりつつ涙なみだしぐるるわが眼めにもなほ紅葉もみぢばはあか

く見えけり

とある。それから本文に入り、「正月の頃ほひ思ひあまりては長
歌もあるべし」と端書して、四季戀・雜の歌が二百九首あり、そ
の中には長歌もあるのである。それでこの集は、保憲女によつて、
もがさのさかりであつた年に、彼女も罹病した徒然の間にあまれ
たものであることは確かである。なお、序文の初めの方に「いま
年の老いゆくまに、あはれなることを思へど、いやしきには、
友とするする人なし」といい、本文に「あえよとて菊の白露のご
へどもすぎにし齡かへらざりけり」思ひきやふたたび著てし墨染
の衣に近くなれむものとは」というような短歌があり、また長歌
のうちに「かくれし親のはねごろも皆忘られて」とか、「芦の根の
けふりに誰もなりはててゆゆしゆゆしといふ程に明日を瀬になる
飛鳥川藤の衣にまづはれて高き踐しき涙川みなかみ早くなりにつ
るかな」とかいつておるところを見ると、どうもそのもがさの盛
りの年は、彼女の晩年で、両親もすでに亡くなつており、また近
親をうしなつて三度喪服を著たことをいつておるらしい。

ところで、「類聚符宣抄」三咆瘡事に「發年々」としてその流
行の年をあげてあるが、聖武天皇の天平七年が始發で、以下延暦
九年・弘仁五年・仁壽三年・元慶三年・延喜十五年・天曆元年・天延二
年・正暦四年・寛仁四年・長元九年の十度が擧げてあるが、これは當

時の記録・史籍に徴して信すべきである。ところで保憲女がいう
「あめの帝の御時に、もがさといふもののおこりて」とあるのは、
「續日本紀」に「天平七年、自夏よる至いたる冬、天下患う咆瘡はうそう病びょう、俗曰いふ
「天死者多」とあるのをいつたので、「あめの帝」とは聖武天皇を
申したのである。もがさ、裳瘡は宛字で、面瘡めんそう、すなわち咆瘡の
ことである。この序をちよつと見ると、聖武天皇の時、保憲女が
この病に罹つたように見えるが、そうではなく咆瘡の始發をいつ
ただけで、自分の罹つた年代は、「伊勢集」の冒頭の「いづれの
御時にかありけむ」と同じく、おぼめかしたのである。しかし、
彼女の父保憲は延喜十七年に生まれているから、それ以前に彼女
がこの病にかかりそうはない。天曆元年(九七四)は保憲三十一
歳で、彼女が生まれておつたとしても童女時代であつたらう。天
延二年(九四七)は、保憲五十八、長男の光榮三十七、だから保
憲女も相當の年になつていたと思われるが、「老いゆくまに」と
いうほどとも思われないし、また父親が健在なのだから、「再
たび著てし墨染の衣に」とか、「芦の根のけふりに誰もなりはて
て」とか、おのが孤獨を訴える必要がない。またその罹病にたい
する父母の心配が少しも記してないところを見ると、それは両親
の歿後らしいから、保憲の卒年である貞元二年(九七七)以後に
したい。そうすると、一條天皇の正暦四年(九九三)の秋頃から
おこつた咆瘡「扶桑略記」と解すべきで、彼女自身「そのほど多
のはじめ秋のをはり」と、その罹病期をいつている。その次ぎの
流行の年である寛仁四年二〇は、春が盛りであつた「日本紀略」
から、この時ではあるまいと思う。その後の長元九年三六になる

と、保靈卒後六十八年にもなり、時代が降りすぎるのである。それに彼女は歌集の序に老はいつてゐるが、その文には相賞激しい情念のうごきがあり、その歌には「思はじと心をもどく心しも惑ひまさりて戀ひしかるらん」常よりも菰のみぎははまされどもあさましくこそ人はつられ」などが巻末、あるいは巻末ちかくに見えてゐるから、古稀の老女の著とも思ふのである。加之、私家集に長歌を収めているのは、梨壺の五人や、曾根好忠、道綱母などまでで、だいたい天曆から寛和ごろまでに名を成した人の集が流行の終末期で、物語でも圓融末期の「宇津保物語」に見えてゐるだけである。尤も「榮花物語」の「石陰」に寛弘八年一一〇六月一條天皇の崩御を弔んだ長歌二首が見えてゐるが、これは左衛門督頼通の室隆姫と一條院女御養子の贈答で、公的の場合のものである。また「賀茂保靈女集」に手習詞の「あめつちの歌」が見えてゐるが、これも「相模集」にも見えるけれど、その盛行期はだいたひ天曆から寛和までで、「源順集」や「宇津保物語」に絶頂の姿を示していると考えたい。そうすると、この「賀茂保靈女集」の著作期を、後一條天皇の寛仁末までは降しがたく、一條天皇の正暦四年の初多から翌年の春にかけてと考えられるのである。

そうして今、正暦四年（九九三）の保靈女の年齢を考えると、父の歿後十六年であり、兄の光榮は五十五歳であるから、だいたひ彼女は四十歳ぐらゐでなかつたかと思う。兼明親王が四十六歳で「如今垂老」と、また保胤が五十に到らずして「予及暮齒」と、いずれも「池亭記」にいつてゐる時代であるから、女性である保靈女が「今年の老いゆくまに」といつたのは、彼らより數

年若い頃としても不自然であるまい。また彼女のむすめ監の君は、彼女の集からみると、彼女の罹病以前に生んだものと見なければならぬが、教通の年齢からみると、その生年である長徳二年（九九六）にできるだけ近づきたいから、正暦四年（九九三）にその母を四十歳とみることは中らずといへども遠からずであらう。そして恐らく彼女は監の君をこの數年のうちにもつたのであらう。しかし、彼女の集のなかにそのむすめのことに觸れたところがないのを見ると、その子の父と不縁になつたので、乳母にでも養育させて、つとめて不愉快な思い出を忘れようとしていたのであらう。監の君の父が未詳で、賀茂女を母としてゐることが、こゝういふ事情を考えさせるのである。またそのむすめは、近衛府の三等官である將監を夫にしたことがあるので、監の君と呼ばれたかと思う。

そして恐らく多病であつた母は、正暦四年以後間もなく歿し、伯父の光榮がそのむすめを養育し、長じて教通に仕えさせたのであらう。それは寛弘・長和の交で、監の君が二十代のことであつたと思う。そして彼女によつて渾身の母の集も今日に傳えられたのであらう。

三

私はこうしてだいたひ賀茂保靈女の生涯の輪廓をあきらかにしたが、それにつけても彼女の集の善本を見たいと思つてゐたところ、今夏圖書寮を訪ね、「新校群書類從」の校合本の「賀茂保靈女集」とともに、桂宮舊藏本の「賀茂女集」（後西天皇宸翰本）

と「鴨女集」を借覽することゝえた。後者は「永仁五年三月十八日、於西山菊房書寫畢、承空。寫本散々之間、乍不審書之、不及校合、以證本可見合也」とあつて、鎌倉の古寫本の轉寫だと思われ、かつ流布本の祖本とみるべきであるが、流布本の序の第二部にある大きな脱文を補ないうる。また「賀茂女集」は、まつたく異本で、序文も流布本の第三部以下がなく、また歌も四季及び戀だけで、雜以下がなく、その數も百四十八首で、流布本より六十二首少ない。その上、歌に出入があり、流布本にない歌が見える。序文、歌詞とも字句の相違がかなりある。例えば、序の冒頭は、流布本に

しきしまの世の中、わがみかどの御親族、國のうちのつかさ、
千々の門過ぎにし年頃ならへる月日のなかに求むれど、わが
身の如悲しき人はなかりけり。

とあるが、「賀茂女集」は、

しきしまの世の中、わがみかどのおほむ六十餘國、百千の宮、
千々の門、過ぎにし年頃ならへる月日のなかに求むれど、わ
がごと悲しきはなしと思ふ人ありけり。

と書き起して、字句の相違のほか、前者は一人稱發想であるのに、後者は三人稱的な敘述になつてゐる。この相違はどこから來たというかと、「賀茂女集」の序には流布本の序の末段にある、前掲の「この歌はあめの帝の御時にもがさといふものおこりて、病みける中に、加茂氏なる女、萬づの人に劣れりけり。さるなかにただもがさをなむ、すぐれて病みける云々」以下がないからである。當時私家集の序文は三人稱で客觀的に敘述するのが普通に

なつてゐたから、初稿本は多分「鴨女集」のように起筆したと思ふ。ところが、増訂本にこの集の編纂動機を述べた一節を序末にかく書き加えたので、序の冒頭を一人稱發想に改めたのであらう。そしてそれはその方が感動が深いからである。その他、初稿序は「しきしまの世の中」と「わがみかどのおほむ六十餘國」はダブツてゐるので、後者を「わがみかどの御親族」となとし、天皇・皇族・貴族・官僚・庶民と當時の日本の社會の諸階級をあげ、年來の經驗に考えてみるが、これらのどの階級のなかに、自分ほど悲しい人はないといつたので、流布本の文章の方がととのつてゐる。「賀茂女集」の方だと、意味は結局同じでも、敘述が地理的と社會的とに交錯しており、その上、天皇・皇族を除外してあるのが面白くないのである。この一節は、彼女の不幸を他の人間と比較して言つたのだが、つづいて、流布本は

年のつもるままに物思ひしげりける時に思ひけるやう、はかない鳥といへど、むまるるよりかひあるは巢立つこと久しからず。はかない虫といへど、時につけて聲を唱へ、身をかへぬなし。かかれば、鳥虫に劣り、木には及ぶべからず。草にだにひとしからず。いはんや人にはならばず。

といい、「賀茂女集」は

としのつもるままに思ひけるは、はかなきとりといへど、時につけて聲となへて、すをかへぬなし。かかればとりにおとり、木にはおよばず。草にだにひとしからず。いはんや人にはなずらうべからず。

と簡單である。ここは賀茂女が、自然界を觀察して、他の生物に

比して我が身の不幸であることを言っているのだが、鳥や虫のよ
うなほかないものでも、季節が来ると、聲いつぱい張り上げて歌
い、生れた巢を出て、他に巢をつくつたり、また脱皮したりしな
いのはないが、自分は随分齡をかされたのに、いつまでも生家に
いて、少女時代とかわらぬのを嘆いているので、彼女の不幸とは、
結婚生活の不如意であることがわかる。當時一般に男が女に通う
ことになつていたが、それは新婚時代のことと、両親でもなくな
れば、夫は妻を自分の家に迎え、同棲したものだが、加茂女はい
つまでもそういう機縁にめぐまれず、親もない生家にあじぎない
生活をつづけているのを悲観して、鳥虫にも劣り、草木には及ば
ず、況んや他の人間にはなずらえないと激昂しているのである。

それで、これも流布本の方が整つており、「賀茂女集」の方は草
稿だと思ふ。しかし、私は一般に生物は親のもとに養育される期
間が長いほど幸福なのではないかという先入見を持つていたので
流布本の「はかない鳥といへど、むまるるよるかひあるは、すだ
つことひさしからず」はまちがいで、永仁本「鴨女集」の「はか
ないことといへど、むまれしよりかひありて、すだつことひと
しからず」は、他の箇所はあまり善くないが、「ひとしからず」だ
けはよいのではないかと思ふたが、「賀茂女集」の本文をみると、
彼女の嘆きが、いつまでも生家にぐずぐずしていて、愛する男と
新しい家庭をつくりえぬ不幸にあることがすぐわかり、それだと
流布本の本文の方が非常によいと思つた。それは、植物はあとに
木と草とをあげてあるのだから、動物は鳥だけでは物たらず、ま
た鳥に巢立つことをいい、虫に脱皮することをいつたのは、對句

としても面白く、結婚適齡期をすぎた女性の焦燥を適確に表現
している。また鳥にかひ（卵）といい、虫に聲をいつたのも、措辭
として巧みである。それから、「賀茂女集」には「もののおもひし
げりけるときに」という挿入句がないが、これは流布本のように
ある方が、「かかれは鳥虫には劣り、」以下の疊みかけたヒステリ
ックな文に抑制を與えて効果的である。次ぎに流布本には

ちはやぶる神代より人をさかしきものにしけるぞ、空を飛ぶ
鳥といへども、水にあそぶいといへども、釣をまうけ、絲
をすけて、その眼をとちて、ふかき海といへども木を凹め
鮎を設けて、おのづから渡りぬ。すべて數へば、濱の眞砂も
盡きぬべう、田子の浦波も數知りぬべうもなし。

とあつて、だいたい人間が自然界を征服する巧智の無盡蔵なこと
を讀えたと考えられるが、傍線を施した箇所がわかりにくい。し
かるに、「賀茂女集」をみると、

ちはやぶる神代より人をかしこしといひおきけるは、空を飛
ぶ鳥といへども、水にあそぶものといへども、釣をまう
け、絲をすげ、心にまかせ取りつめり。ゆくすゑも知らず、
深き海をも、木をくぼめて、かちをかけて、おのづから渡り
ぬ。すべて數へば、濱のまさごもつきぬべく、田子の浦波も
數知りぬべくなむ。

とある。括弧の箇所は誤脱だが、他はこれでよく通ずる。尤も「水
にあそぶもの」は、流布本の「水にあそぶ魚」の方がよい。また
「釣をまうけ、絲をすげ」は釣竿のことで、これでは魚はとれる
が、鳥はとれない。これは作者がうっかりしたのかも知れないが、

兩本共通に脱しているところを見ると、「釣をまうけ」で釣釣を「絲をすげ」で弓をいつているかとおもう。また流布本の「かぢをまうけ」は、この「釣をまうけ」と語が重複して面白くなく、ぜひ「賀茂女集」の「葩を掛けて」を取りたい。「すべて數へば云々」は、「人間のかく自然を征服する手段を列擧すると、そのたくさんあることは、濱のまさにも、田子の浦波にも、その數がまさる」ということで、この異本の文の方がよくわかる。流布本を活かせば、「濱の眞砂で數へても、眞砂の數がつきてしまひそうだし、田子の浦波ではかつて、その數を知ることができないほどある」という意になるが、多少無理である。かく兩本それぞれ長短があるが、異本は論理的な明快性にまさり、流布本は修辭的な齊整の美にすぐれているといえよう。

しかし、流布本には誤脱の結果、亂麻のような文章があつて、いかにしても解き難いのが、この異本でわけなくわかるところがある。それは例えば前記の文につづいて、緋衣をまとう五位以上の貴顯の男女が年々に官位が陞り服色が改まるのに、六位以下の綠衣の地下人は、何年たつても官位停滯し、それだけに望みは深いが、身の沈むことを嘆くことをいい、次に、

あるは世を背き、法におもむいて、心を深き山に入れて、簍をかけて、石の疊に身をかけて、苔の衣木の葉をつぎにして、松の葉を喰ふ。これは齡を保つと聞きたり。さるによりて、戒をたもつことによにこそ身をやつし、人とひとしからね、ゆくさは露にぬれて草の上にゐ、われよりあがれりとみし人の、罪の底なるを救はんと、身よりかしこき人の身なり。

とあるが、この流布本の文はいかにも解しにくい。ところが、異本には、

あるは世を背きて、いと深き山に入り、簍をかけ、石の疊に、木たけの節ふしを杯はしにして松の葉を喰ふ。これ齡を保つこと、玉に似たり。さるにより命を保つ。この世にこそ身を養ひ、人とひとしからね、ゆくさは露にぬれぬ蓮はすに（す）みて、よりすぐれ（し）人の罪の底なるを救ふべしと見えたれば、人の賢き道なり。

とあつて、大體の意味はすぐわかるのである。「木のふしをつぎにして」は解しにくい、樹の節のふくれているところを、高杯たかはいとしてか、あるいは机きにして松の葉を喰うということらしい。また松葉は延齡の仙藥で、「玉に似たり」は、珠玉を服すると同様の効果があるということらしい。以下は、僧侶という者は、この世でこそ人に劣つた粗末な生活をするが、來世は結構な蓮の上に住み、自分より高位高官であつた人の魂をも救うということだから、人間として立派な道だということである。

こういう風に、私は逐次本文批評して行きたいのだが、紙幅がないから、異本・承空本をかく検討してみた結果簡明しえた、「賀茂保憲女集」の文藝的價值についてだけ簡単に述べよう。

四

まず、本集の序文は、四つの部分にわかれる。第一部は「しきしまの世の中」にはじまつて、「春夏秋冬、四季なり」まで、社會的に、生物的に自分の不幸なるをいい、その悲しさを慰める

ために作歌に志し、今おこがましくもこれを四季に分類して、家集にまとめたことを敘している。第二部は「よろづよらす日の本の國」からはじまつて、「天の下なる世の中は、斧の柄杓ちぬべうなむありける」におわるが、日本の歌枕と四季の推移とそれにからむ人事を敘べていて、日本の風土と民族生活との平安朝的な關聯が描かれてあつて面白いが、流布本には大きな誤脱があり、最も難解な箇處である。第三部は「世の中はじまりける時」からはじまつて、「いひ集むること、大空を紙一枚に取り做して書く」といふやうなり」とあるまでで、戀愛生活と和歌との關係を歴史的にまた時世粧として種々考察している。第四部は「この歌はあめのの帝の御時に」にはじまり、「曇りつつ涙しぐるるわが眼にも猶もみち葉は赤く見えたり」まで、この集を編んだ時の著者の境遇を敘した箇處である。このように、この序文は整然たる組織をもつており、絶えず社會における自分というものを考え、そこから作歌心理や著作動機を繰り返し繰り返し説明しており、その社會的・心理的な人生や文藝にたいする考え方がいつも中核になつてゐることは、彼女の卓越した思辨を思わせる。それとともに彼女の胸には絶えず激しい情念が燃えていて、それと知性の闘いが、このエッセイのつきせぬ魅力となつてゐる。

以下、各部について、彼女の特徴を最も發揮した文章をあげ、これに寸評を試みる。

まず、第一部では、前述の貴族・僧侶の生活を敘したあとに、女の生活に筆を轉じ、女性に貴顯の望となれば面白いことを折あつることに見聞するし、日の光もさすことまねた陋巷にひつこつ

ていても、時節が來れば、露の光でも、蟲の音でも、草の花でも自然見たり聞いたりできるといつて、その次ぎに、己が身に返り、かくさまざまなることを見れば、我が身の悲しきこと。命は、幸ひを定めたらぬ世なれば、さりととも若き頼みに頼みしことを、今年の老いゆくまゝに、あはれなることを思へど、賤しきには友となる人もなし。拙なきには雅やかなることなし。かかれど、心ひとつに嘆きて、朝には白妙の衣に紅ゐの時雨降りしき、夕には墨染めの闇に昏れまどひて、ある時には胸に思ひを焚きて、灰に響きつれば、煙りとなりて、雲とともにみだる。ある時には思ひ流して水に響けば、波とともにみだるに（と）心をばなくさの濱によせ、かたちをば戀ひするさまにもてなして、面白きことを心にこそ思へ、誰にかはいはむ。めづらしき言の葉をいひ出でたれど、誰か頭かたぶけ、深き味はひをも知らむ。世になき玉を磨けりといふとも、誰か手の裏に入れて光をあはれびんと思へど……と敘しているが、老殘・貴賤・孤獨の境にあつて、なお胸中の情炎はいや燃え、文藝というものは灰や水に書いた文字のようにはないものと知りながら、言語に表現せずにはられない強い創作衝動や、さては歌人らしく擬うて歌枕に心を馳せ、戀ひする人のごとく身をもでなし、化粧などして、人知れず、ロマンティックな空想を樂しむ文學女性らしい感慨をのべ、そうして出來た作品を、「めづらしき言の葉」とも、「世になき玉」とも誇り、世人の解しえないだろふことを豫期して、傲岸に肩を聳かせてゐる。そして身分階級の貴賤と藝術的才能の高下は一致しないはずだが、塵

★前者をもつて後者を評價する世間の是非なさに思い亂れることをいい、その物思ひに一層藝術的衝動が強められ、「ある時は長き夜を明し、或る時は短かき日を心もとながり、人知れぬ戀なきにしもあらば、枕さだめぬうたたねの夢の寤覺めのほど」に、花・霞・露・草葉・鳥・蟲につけて、春夏秋冬、四季の歌を書き集めたといつてゐる。そして「しづのをだまき繰り返し、賤しき心一つをちぐさになしてひ集めれば、あるは四十文字、あるは二十文字などして言ひ集めれば、三十文字にだにつづくることかたきを」は對世間的な謙遜にすぎないが、「とり集むれば、近江の海の水壺もつきぬべく、かき集むれば、陸奥の檀の紙もすぎあへず」は、その旺盛な創作意欲をものがたつてゐる。

しかし、第一部の最も出色な箇所は、日シ比較論で、さきの文の直前に、

蘆原の中つ國なまめかしく、たをやかなることはまさり、さかしくかしきことは、唐には劣り、やまのすがた、うみのほとり、あやうかひあり。面白しといふ人にあはば、なにはのことにつげざらむ。されど人の心あはずして、をかしきことはすくなくして、うき事は多かり。

と言つてゐる。大意は、日本は艶で優美であることは卓越しており、理知的で賢明であることはシナに劣つてゐるが、山の姿や海邊の景觀は不思議に佳い。風雅を解する人に出會うなら、あれこれについて話したいことがたくさんある。しかし、どうもこの國の人は心が一致せず、面白い事はすくなく、憂い事が多いといふことで、折角優艶な文藝の花の繚亂と咲き誇り、山紫水明の自

然美のゆたかな日本でありながら、人の心があはず、相思間諍の友がえられないのをなげいてゐるのだが、「人の心あはず」の一語に、當時の機關政治及び莊園經濟の發展にともなう權力爭奪・社會不安・神經戰爭の險惡な世相人心が痛々しく表現されてゐる。

第二部は、最初に平安京・鏡山・鈴鹿の關・伊勢の海・住吉の濱などの名勝を順次に列挙して、この國の風光の明るく麗わしく豊かなことを簡単に敘べ、次ぎに元旦から大晦日の夜に到るまでの、四季の推移にともなう自然の風物之美とそれと交錯する人間生活や年中行事之美を悉く記し、作歌のための歳時記、四季物語の體裁をなしてゐる。正月の條に「また程にあひては、草の庵に久しき松を飾りて、戒をばたもたずして、ことぶきを保てるさまでも」とあるは、新年の松飾りが當時すでに民間に行われており、それが延壽の呪であつたことがわかり（普通は平安季世の惟宗孝言の詩を初見とする）、また七夕の條の「よばひ星の……まれにあふ曉の涙を落したる、露とあつめて移し据ゑ、書き交したるのちなむ、天・地・星・空といふことを本にはしける」とあつて、七夕の後朝の露を採つて戀文を書く習慣があり、それから、あめ・つち・ほしの四十八字歌を手習の本としたという傳説があつたことゝる知りえ、大晦日の條に「道のほどに老いて頭白くここかしこに節料もてありくと騒ぎて、家（々）に親靈に逢ひ見むと待てば、若き人・童べは『とく鬼來』など心もとながりて、此處彼處うち鳴して、いつしかうちやらはんとぞ語らふめる。」とあるので、この日の市井は老人は生靈迎えに忙しく、若き人は小兒まで鬼やらいの行事に夢中であつた様子が眼に浮かぶなど、その一斑だが、

頗る興味がある。

ただ流布本には、春から夏にうつる條に「あしの」と「たちきる」の間に相當長い説文がある。それを「賀茂女集」及び「鴨女集」によつて、次ぎに掲げる。二重括弧のなががその箇所である。

やうやう水とけて、融のひびき高く落つる水、河の水まさりて、蘆の《よ》(節・夜の掛詞)短かう、春の日永なる。鶴は脛を高くして半袴著たりと思へり。鶯暖けき日をころも(頃も・衣。よきめ)えたりと思へり。波とともに佇みて、磯菜摘む。野邊には白妙の衣著たる人々、簞ひきさげて若菜摘む。柳の眉ひろげたり。花の姿あざやかなり。貌鳥心のままに遊ぶ。水は鏡に似たりといへども、何か恥かしからん。山峽には呼子鳥の聲なき、蝶は花の下になづさふ。歸る雁だに常世を忘れず。散る花宿を定めず。鶯の羽振の花を絶たずして、暮れ行く春を惜しむ。子をひとなす(育てる)鳥はたつ月日を悦ぶ。日をふ(經・降)る雨は多かれど、苗代水を争ふほどに、夏になりぬれば、火桶をむばたまのくろきすみに置きて風の巢になし、風なきあなたに捨てたり。蝙蝠は時にあひて、薄き衣をたちきるとて、人草木をまねびて、卯の花ころも白う變ね……

なお、このように四季の推移を敘したあとに、次ぎのような感想を述べている。

かく時につけて憎くもあらぬ世の中、まして人の命の常に老い衰へずば、何の悲しびかあらむ。されど人の心として、あはれびは少なく、逍遙すとは、春は子の日といひて、野邊

に出でて、おのが命を松に肖えよとひきのべ、鳥をば射殺し、秋は紅葉見るとて、野邊にまじりて囀を放ちたり。漁りをしたきたるものは狩衣なるに、世常ならぬにやあらむ。されど、(と)いひて何事もいかげせむ。世を背きたる山伏ばかりぞ生き物の命を殺さで、木の實のみは扱き喰へ。それすら慾の法師は悔いるとかぞ聞きし。かかればなほ難波津の川の上り船はせばきなり。蓬萊の山の龜の劫をつくすとても、げにうち消てんこの世なり。木樵の腰なりけむ斧よりも、天の下なる世の中は、斧の柄朽ちぬべくあるべきをや。

意味不明の箇所も幾らかあるが、彼女はだいたいこの國の四季の風物美には満足しており、人の命に老衰さえなければ、何の悲しみがないと言つておる。しかるに、この世が無常なのは、人間の心にあはれみがなく、いらぬ殺生するからで、それさえなければ、斧の柄も朽ちぬべう、楽しくおもわれるこの世であるのにと残念がつている。賀茂女の自然愛と生物愛が、美しくあらわれた文章である。

第三部は、戀愛觀で、まず、人の世の初めに、「にはたたき」という鳥のまねをして夫婦の道をおこない、草の種ならで、繁殖したことをいい、次ぎに

さてその人のこども廣くなりて、かしこきはたかき人となり、をさなきはげす君とさだめける。

とある。これは人は「昔たかきいやしきなく」平等だつたが、賢愚の差があつて、貴族と庶民にわかれたことを言つたので、福澤諭吉が「學問のすすめ」に「人は生れながらにし貴賤貧富の別な

し。唯學問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり、無學なる者は貧となり、下人となるなり」といつておるのと、説を同じうする。また、彼女は人間がもと平等であつた證據に、「たかき女にも、いやしき男心をかけ、いやしき女にも、たかき男ある」ことをあげたのは面白い。それから「人はみな同じゆかりなり。されば高きいやしきなるばかりこそあれ。いつもか高きいやしきあらめ」と、人間は本質的に同類であり、貴賤の階級は一時的現象としてあるだけで、いつかまた階級なき社會の來ることを豫言しているのは面白い。

次いで彼女は戀愛生活の種々相を列敘し、男女「いひそむる言の葉、たをやかなるみやびには何をやすべきとて、和歌をよみかわすようになったといつておる。すなわち文藝の戀愛起原説を述べているのである。また、明日知らぬ世に戀愛何するものぞという人に、「面白き櫻常にちらずば、人にいとほれなむ」と反駁し、かの兼好の「定めなきこそ世はいみじけれ」という説に先驅し、續いて「露の命の程、朝顔のしほまぬ先きにだにたはれずば、何をかたはれにせむ」と男は利那的な戀愛遊戲に耽けるが、そのため「女は池水のいひぐらすことを、河竹の葉しげきことも、大空を紙一校にとりなして書くともといふやうなり」というような不幸な状態に陥いるが、それから救うものが文藝であることも述べているのである。

第四部は、彼女が當時流行した飽瘡をひどく病んでゐるうち、この歌を詠んでいたら、不思議にあぶないところを助かり、豫後のつれづれにこの集をあんだことを述べている。そして、その間

彼女は「ただ心ひとつに思ひて、わが身のはかなきこと、よの中の常ないこと、ながむる夕、空に残る虫を詠み、或る時はあまたの魂をかたり來て歌合をして、勝ち負けは、心ひとつに定めなどしてぞ、勵めて明し暮しける」といつておるが、病牀でひとり想像のなかで歌合をして、勝負をきめたなどあわれではないか。彼女が家集をあむ決心したのは、自分が秋を楽しみにして植えておいた薄・菊などが病中に枯れたからでもあるが、この編纂にあつて人手を借りず、單獨で決行した。それで「題も知らず人もなし。ただ詠まるる時を面白きにすれば、冬も櫻ころのうちは亂る。夏の日にも心の中には雪かきくらし降りて消えまがひなどすれば定まる事なくて、書き集むる手も定めたらす。端に書くべきことを奥にかき、奥に書くべきことは、端に書き、さだまることなし」と、その作歌態度の幻想的なこと、及び編纂の序次なきことをいつているが、本文の歌集部を見ると、だいたい四季・戀雜と整理してあり、また雜の小序に「四季の歌・戀の歌とはさるものにて、さうぞいとあはれなる」といつて、必しもロマンティックな、幻想的な歌だけを好まず、今なら生活歌とよぶべき雜歌のようなリアリティなものにも非常に愛着をもつていたことがわかる。

五

尤も現存本は、いずれも本文の分類にまちがいがある。今それを流布本についていうと、春の歌三十四首、夏の歌三十四首、秋の歌二十一首、冬の歌六十四首、戀十六首、雜の歌四十首、計三

百九首となつておる。(これには序末にある「くもりつつ涙しぐる」の歌を入れない。)ところが、多の歌六十四首のはじめの十六首(「ここまでは秋といへり」との左註のある歌まで)は秋に入れるべきであり、また終りの二十二首(「あしたづの聲をほにあげてわが戀は天の河原に今ぞ舟出る」以下)は、實は戀歌である。このまちがいは、原集を増訂する時に起つたらしく、これを除くと、春三十四首、夏三十四首、秋二十一首、冬二十六首で、計百十五首となる。ところが、流布本の奥書に「已上百十六首、内他人歌、長歌、加茂女(保憲女)及び「私云歌員數百十六首云々。而二百餘首在之如何。以他本二可三校合裁」とある。さきの百十五首に巻末の長歌一首を加えると、ちやうど流布本奥書にいう百十六首になる。そこで、「賀茂保憲集」の原本は、この四季の歌に宸翰本「賀茂女集」の序文を加えたものであらう。そののち彼女がこの四季の歌の秋の部を増補し、戀・雜の部を新たに加えた時、序文にも改訂増補を試み、承空本「鴨女集」あるいは現行流布本の祖本が成立したのであらう。ただ、その後、初稿本の歌集の部は、増補本の歌集の部と接觸し、春三十五首、夏三十三首、秋三十四首、冬二十七首、戀十九首、計百四十八首に増加したが、巻末の長歌は失なわれたのであらう。なお、これに流布本に見えない歌が三首見えるのは、流布本が脱したので考えたい。要するに、宸翰本は初稿本の面影を傳え、流布本は再稿本の系統に立つていて、ともに貴重な文獻だと思ふ。

ところで、彼女の和歌はどんなであつたが、四季・戀・雜から二首ずつ擧げてみよう。

青柳の糸にやいをはかからむおろせるかげの網に似たれば
青柳の糸のように細くしなだれた枝の水に映つているのが網に似ているので、水のなかに泳いでいる魚がかかるだらうというのが、春の柳の若々しく水に影を投じているようすや、水中に棲む魚群の噂々としているさまも透きとおつて見えて、いかにも麗らかな春の野川のほとりを想わせる佳い歌だと思ふ。

夏の野の草刈笛の口馴れてかへるさがなし夕暮の空

草刈童が夏の野に草笛をくちずさむに夢中になつて、夕暮になつてもいつかな家に歸ろうとしない、牧歌的風景を詠んだもので、この時代の作としては異常に新鮮である。

秋風の寒き宵間に萩の葉にそそのかされて人を戀ひしき

あき風の寒い晩、早く闇に入つて、戸外の萩の葉が風にそよぐ音を聞いていると、心がときめいて、しきりに戀心が起るといふので、自然の推移と戀愛心理の微妙な交錯を描き、しかも、いかにも女性らしいデリケートな神経がはたらいている。

年ごとに人はやらへど目に見えぬ心の鬼は行く方もなし

毎年大晦日に人は鬼やらいをするけれど、目に見えない疑心闇鬼は追い出すことが出来ぬと見えて、何處へも行かない。(年々疑いばくなる自分を嘲笑した戯歌である。)

戀の歌には、特にすぐれた作品が多い。

臥すと起くと常呼ばひする嘆きには木霊出で来るものにぞありける

わが嘆息の反響が氣味悪く聴えて来るまでに、夜ひる絶え間なく翻轉反側して男の來ぬを惱み呼ぶ女のすがたが、赤裸々にうたわ

れていて、その情熱の激しさを思わせる。

亂れつつ戀をこそすれ牧馬のみだれておほす髪ならなくに
牧場に放ちがいにしてある馬のたたてがみが延びるがままにして
あつて、風のままだに亂れている——それではないが、自分も心を
はてしなくみだしつゝ戀をしているというのだが、譬喩が譬喩だ
けに、性的な情念が熾烈に感じられる。

死ぬといへどなほ魂はほのめきし見ては骸さへなき心地する
人間が死ぬ時には、まだ魂が體を遊離しようとして、ほのかに動
くが、戀人にあうと、魂はおろか、體までがなくなつてしまふ。
愛は死よりも強し。この歌は、性の歡喜のきわみを詠んだものと
して、古今に絶する秀歌であらう。

雜の歌にも、すぐれた作品が多い。

わたつみを波のまにまに見渡せばはてなく見ゆる世の中のう
さ

石山寺から琵琶湖を望んでの作かと思うが、はてしない世界苦を
漫々たる大海に見立てたのは面白い。

思はじと心をどく心しも惑ひまさりて戀ひしかるらん
「思うまい」と、なお思う心を叱責する心が、却つてまどいをま
し、戀いしさを募らせるであらう。と思ひ、かく思ひ、あきらめ
ようとして、却つてあきらめかねる、人間の心理をよく表現して
いる。

冬の夜の涙のかかるむばたまの髪は氷にむすばはれつつ
液體空氣にふれたような、鋭い痛みが感じられる歌である。

あさましき事は夢かと驚けど現つは覺めぬものにぞありける

大變な不幸にあつて、夢かと驚いたが、いつそ夢ならさめてよい
のだが、それが現實であるから、さめることのないのが、ひどく
悲しい。これは機智にすぎぬとも言えようが、しかし、こういう
事實が人生にないとは言えぬのである。

賀茂女の歌は、洗練された措辭と、精緻な手法で、新鮮な感覺
や、鋭敏な心理や、野性的な情念を大膽に表現しており、その點
で萬葉歌人を想わせるものがあるが、和泉式部のような娼婦性は
ない。その社交性を缺いていることは好忠以上で、ために彼女が
敕撰集に入れられるには、京極爲兼の時代まで待たねばならな
かつたのである。しかし、それだけ彼女が新しかつたとも言える。

・ 莊園社會に富を獲得しえた受領階級の女房の文藝が宮廷に華さ
いた時代に、貧乏な京官の女とうまれ、多くの不幸を経験しなが
ら、家學の陰陽道の迷信にもとらえられず、できるだけ理論的に
社會・自然・自己を考察し、その激しく心身をなやました情念をひ
たすら文藝によつて制御し、孤獨の生活に克ちえたのは非凡だし
特に彼女が在來の招婿婚に満足せず、夫との共棲生活を熱望して
いたのは、古代家族的なものへの無意識的反抗として注目する價
値がある。また彼女の文にも歌にも庶民的なものが著しくあらわれ
ており、貴族主義的なところ、古典主義的なところがないのは、
更に彼女自身ロマンティストであり、幻想家でもあるのに、その
思辨及び作歌があくまでリアリストであるのは、時代を超越
したが彼女の偉大性をあらわすものだと思う。(一九五〇・八・一五)